

## 第一章

蒸氣船が出現する以前には、大きな海港の埠頭ふんとうをぶらついてみると、休日の装ひすいに粹すいをこらした褐色の船乗りの一團いちだんを今よりもよほど頻繁に見かけたものだ。陸に解き放たれた軍艦や商船の乗組員の連中で、時によると、彼らは朋輩ほうばい中でも抜きん出て風采の立派な男の兩脇に取りついたり、用心棒よろしくその周りをぐるりと取りかこんだりしながら歩きまはつた。あたかも牡牛座にひとときは輝く一等星アルデバラン（牡牛座の中でオレンジ色に光り、牡牛の目の部分）が小さな星々を従へて運行するかの如き有様だったが、そのひとときは目立つ者こそは、海軍も商船隊もまだまだ散文的でなかつた時代に、「花の水夫（Handsome Sailor）」とうたはれた船乗りであつた。

だが、「花の水夫」は己が立場を鼻にかける風はさらに無く、生れながらの王者の如き自然かつ無造作むざうさくな態度で仲間の自發じはつ的な敬意をすんなり受け容れてゐるやうに見えた。

顯著けんちよな例が思ひ出される。かれこれ半世紀も昔になるが、リヴァプールの「皇太子記念埠頭」の街路にそびえる薄汚れた巨大な壁（邪魔になるからとて随分まへに撤去された）のすぐ

近くで、私はある漆黒しつこくの平水夫の姿を見かけた事がある。その見事な黒さから察するに、彼はハム族（「ハム」は「ノアの箱船」のノアの次男の名で、黒色人種の祖とされ）の純粹な血をうけつぐ生粹のアフリカ人だつたに違ひない——體格たいかは均整が取れてをり、背丈も人なみ外れて高かつた。派手な色の絹のネッカチーフを頸くびのまはりにゆるやかに巻き、その兩端が漆黒のあらはな胸板の上で踊つてゐた。片耳には金の大きなイヤリングをつるし、格子縞のひものついたスコットランド高地風の縁なし帽が恰好の良い頭部を引き立ててゐた。七月の暑い眞晝まひるだつたが、汗でつやつやしつたその顔はいかにも蠻族ばんぞくらしい陽氣な輝きを見せてゐた。白い齒を光らせては左右の朋輩と愉しげにまた活發に言葉を交し、水夫仲間の中心になつて浮かれ氣分で歩を進めてゐた。その仲間といふのが様々な種族や色とりどりの肌の色から成る甚だ雑多な集團で、かの有名なアナカールシス・クローツ男爵（プロイセン生れのフランス革命の指導者。一七九〇年六月十九日、パリのスラムの住民に諸民族の衣裳を纏はせ、彼等を率ゐてフランス國民議會に赴き、全人類の平等を主張。ロベスピエールと對立して處刑される。）（一七五五—九四）に率ゐられて、フランス第一國民議會に全人類の代表として喚問されても少しもをかしくない、とさへ思へるやうな顔ぶれだつた。道行く者達がこの漆黒の神像に自づからなる敬意を捧げるたびに——立ち止つて見つめたり、それほど頻繁といふ譯ではないが、感嘆の叫び聲を發したりするたびに——雑多なる従者どもは敬意を呼び覺いんゆます因由をなした自らの同僚を

いたく誇りに思ふのだつた。云ふならば、靈驗あらたかな大牡牛像のまへに信徒どもがひれ伏すのを見て、アッシリアの僧侶が鼻をひくつかせて得意がるやうなものだ。

話を戻さう。私が問題にしてゐる時代の「花の水夫」は、時によると、かの皇帝ナポレオンの義弟にしてナポリ王となつた伊達男、ミユラ元帥（フランスの元帥。ナポレオン一世の義弟で將軍。その浪漫的氣質や美麗な衣裳への偏愛で知られた。一七六七―一八一五）を水夫仕立てにしたやうな出で立ちで陸地を闊歩する事もあつたが、例の「くそつたれビリー」の如き洒落者しやれ氣取りを示す事はついぞ無かつた。この手の愉快な洒落者どもは今やほとんど姿を消したが、時にその末裔まつえいにふいとでくはず事もないではない。しかも、大荒れのエリー運河（ニューヨーク州アルバニーとバッファロー間の運河。ハドソン川とエリー湖を結ぶ。一八二五年完成）で小舟の舵をにぎつてゐたり、運河沿ひの船曳き道の安酒場で氣焰きえんをあげてゐたり、元祖の洒落者をしのぐほどの愉快ぶりだが、それはさて置き、我らが「花の水夫」は例外無しに自らの危険な仕事に熟達してゐて、その身體つきたるや、筋骨たくましきボクサーもしくはレスラーさながら、力と美とを兼備してゐたから、數々の武勇談が傳へられるのも無理はない。陸に上ればチャンピオン、海の上では水夫仲間の代辯者、切羽せつぱの際には必ず先頭に立つやうな男伊達であつた。強風の中、中檣帆ちゆうじやうはんをちぢめて絞らねばならぬとなると、それをやるのはやつぱり彼だ。風吹きすさぶ帆桁の先端にまたがつて、鑑あぶみより

しく足場綱に足を踏ん張り、手綱たてなよろしく耳綱を両手で引つ張り、あたかも驕馬かんばブケファロス（アレクサンダー大王が遠征で用ゐた軍馬の名、大）を馭する若きアレクサンダー大王さながらの勇姿。雷鳴とどろく大空に牡牛座の角で撥はね上げられた有様とでも云はうか、堂々たる體軀たいくから大音聲だおんじやうを發し、帆桁や帆柱にとりついて奮闘する仲間達を甚だ陽氣に勵はげますのだ。

彼等は道德的性格と身體的性格とのほど良い調和を示してゐた。實際、前者に基く品格を具へてゐなかつたならば、いかに見目形みめかたちよく強壯な體力たいりよくを誇らうとも（それらが兩々あひ俟まてば必ずや男の魅力を引き立てるもの）、いかに「花の水夫」にしたところで、天與てんよの資質に劣る同僚が時として彼に示した心からなる讚嘆の念は引き出せなかつたに相違ない。

物語が進むにつれて色々重要な相違が明らかにはなるものの、少くとも外觀に於て、そしてまた性格に於ても、正にかくの如き注目の的となつてゐたのが、空色の目をしたビリー・バッドだつたのである（もつとも、以下に述べる諸々の事情ゆゑに、後にはもつと親しみを込めてベイビー・バッドと呼ばれる事になる）。年齢は二十一歳、十八世紀の最後の十年も終らうといふ頃のイギリス艦隊に於ける前檣樓員ぜんじやうろうであつた。これから物語る出來事が起る少しまへ、彼は國王陛下の海軍に参加する身となつた。歸航途上のイギリス商船に乗り組んでゐた所、英

佛海峡に於て、外洋に向ふ英國軍艦、七十四門艦

(七十四門の砲を裝備した大型軍艦。上下二層の砲列甲板からなり、戦闘能力が高く機動性にも富む、十九世紀初期までのヨーロッパの

主方

「ベリポテント(勇武)」號に強制徴用されたのだが、それと云ふのも、當時の如き動亂

期には珍しい事でもなかつたが、この軍艦は人員不足のまま出航する事を餘儀なくされてゐた

のであつた。徴用のため乗込んで來た臨檢士官ラトクリフ大尉は舷門(船の上甲板の側面にある出入口)でビリー

とぼつたりでくはすや、たちまちビリーに目をつけた。その後、乗組員を正式に後甲板に整列

させて入念に品定めをしたが、結局、ビリーだけを彼は選んだ。ビリーの後では整列した他の

連中が見劣りして見えたのか、それとも商船が人手不足なのを見て取つて幾分やましく思つた

のか、理由はどうあれ、最初の衝動的な選擇(せんたく)に大尉はすつかり満足した。商船の仲間達が驚い

た事に(もつとも大尉は大いに氣をよくしたに違ひないが)、ビリーは一切抗辯(かうべん)しなかつた。

とは云へ、どんなに抗辯したところで、鳥籠に放り込まれた五色ひはの抗辯同然、無駄な抵抗

でしかなかつたらうが。

この不平一つ云はぬ、殆ど嬉しげなまでの従順ぶりに商船のグレイヴリング船長は驚いて、

無言の非難の眼差をビリーに向けた。この船長といふのは、どんな職業に於ても、よしんば卑

賤な職業に於ても見出せる類の、例の全うな人々の一人——「立派な人間」と呼ぶのに誰もが

同意する類の人間だつた。また、わざわざ報告せねばならぬほど奇妙な事でもなからうが、この正直な御仁は荒海の航海者としてどうにも手に負へぬ大自然の力と生涯戦つて來たにもかかはらず、尋常な平安と静穩とを何よりも愛してゐた。他の點について云ふならば、年齢は五十歳くらゐ、やや太り氣味で、人好きのする顔立、顎鬚あごひげはなく、好ましい色艶いろつやをしてゐて——どちらかと云ふと丸顔で、温かみのする知性が面にあらはれてゐた。順風に恵まれ萬事ばんじが順調な晴れた日など、船長の聲音こゑの一種音樂的な響を耳にすると、それは正しく彼の最奥の本質が何ものにも妨げられず流露してゐるものやうに思はれた。彼はすこぶる慎重であり、はなはだ良心的でもあつたから、それらの美德が彼の胸中に時に過剰なまでの不安感を惹き起す場合もないではなかつた。船が陸地に近い海域を航行する時、グレイヴリング船長は一睡も出來なかつた。他の船長ならばさして深刻に受け取る筈もない事柄にも重大な責任を感じたからだ。

さて、ビリーが前甲板下の水夫部屋で己れの所持品をまとめてゐる間、「ベリポテント」號の士官はと云へば、何しろ遠慮を知らぬ無骨者ぶこつだつたから、グレイヴリング船長がどうにも歓迎しがたい出來事に心を奪はれ、通常ならば客人を手厚くもてなさねばならぬのに、それを失念してゐる事などまるで意に介する風もなく、自らさつさと船長室にやつて來て戸棚の酒瓶に

躊躇なく手を伸ばした。酒には年季の入った古強者ふるつはものだったから、さういふ類のものを見つけるのに苦勞はなかつた。當時、打ち續く大戦亂の世にあつて、海軍暮しのありとある辛酸や危難を経験しても、官能的悦樂への本能が少しも損はれない船乗り達が實際にゐたものだが、正しく彼もその徒輩であつた。己れの任務を彼は常に忠實に果した。けれども、任務といふものは時に無味乾燥な束縛でしかないから、その不毛の荒地の如き味氣なさに潤うるほひを與あたへるべく、能ふる限り酒精の肥料を施してやらうとした譯だ。船長室の主としては、強ひられた接待人の役割を可能な限り優雅かつ機敏に果すしかない。酒瓶が登場した以上はやむを得ぬとて、船長は無むを云はせぬ客人のまへに黙つて酒杯と水差とを差し出した。とは云へ、相伴しやうばんにあづかる事までは遠慮して、士官の平然たる態度を慥然ぶぜんたる面持で見守つた。士官の方はグロツグ酒を悠々と水で割ると、三口で飲み干して空の酒杯を遠くへ押しやつたが、手の届かぬほど遠くへ、といふ譯ではない。さうして椅子にどつしり腰を据ゑ、さも満足さうに舌舐なめづりをして主人の顔を真正面から打ち眺めた。

相手の一連の動作が終ると、主人が沈黙を破つた。その聲こゑには憂はしげな非難の響きがこもつてゐた。「私の一番いい水夫を、それこそ取つて置きを、奪つて行かうといふのですね」。

「勿論、解つてゐます」と相手は應じるや、酒杯を手許にひきよせた。もう一杯、頂戴しようといふ譯だ。「解つてゐますとも。いや、洵に申し譯ない」。

「失禮だが、解つてはをられない。よろしいか。よくお聞きなさい。あの若者を乗せる以前、この水夫部屋は喧嘩好きなごろつきどもの巢窟さうくつながら、正に、この『人權』號の暗黒時代でした。私は心勞のあまり、パイプを燻くふらしてゐてもちつとも美味おいしくなかつた。所が、ビリーがやつて來た。まるで、氣性の烈しいアイルランド人同士の喧嘩騒しやうぎをびたりと鎮しづめたカソリックの坊さんみたでした。と云つても、お説教をたれたとか、特別な事を云つたりやつたりしたとかいふのではなく、ただ、人徳があの若者から滲じみ出て、連中の苛いらついた氣持を和らげてしまつたのです。連中と來たら、ビリーが大のお氣に入りになつて、大好物の蜜にかる雀蜂すずめさながらの有様。もつとも、連中の親玉格の男だけは別で、火のやうに眞つ赤な、もぢやもぢやの頬髻ほほひげを生やした大男ですが、新入りをやつかんだのでせう、仲間に向つて、『かほゆい優男やさをとこ』なんぞと馬鹿にしたやうな呼び方をして、あんな奴にどうせ鬪鷄とうぎの根性なんぞある譯はない、どうでも一丁頑張つて一悶着起してやらなければ治まらない、そんな積りでビリーに向つて行つたのです。ビリーはじつと我慢して、落ちていて氣持よく應對おうたいした——ビリー



には私と似たところがあつてね、喧嘩騒ぎは大嫌ひ、といふ譯で——けれども、所詮、それも無駄でした。さうして、ある晩、當直の時間の時、赤髯め、皆の面前でビリーの肋骨ろっこつの下のところをいかにも馬鹿にしたやうな態度で小突かうとした。サーロイン・ステーキの肉はどこから取るか、教へてやらう、などと云つてね——何しろ、奴は昔、肉屋をやつてゐたもので。と、その瞬間、ビリーは電光石火の早業で、思ひ切り腕を飛ばした。ビリーとしては、そこまでする積りは全然なかつたのでせうが、大男の馬鹿者に恐るべき一撃をくらはした。正に一瞬の出来事。その素早さに大男がたまげたのなんのつて。さうして今では、驚くぢやないですか、赤髯め、ビリーにしんから惚れ込んでゐる。あれが嘘なら、途方もない猫被りねこかぶと云ふしかない。とにかく、誰もがビリーを愛してゐて、代つて洗濯をしてやつたり、古いズボンを繕つくろつてやつたりする者もあれば、大工に至つては、暇をみつめて小綺麗な引き出しなんぞを拵へてやつてゐる。ビリー・バッドのためならば誰もが何でもやりたい氣持になつてゐて、この船はまるで幸せな一つの家族と云つていい。今、あの若者にゐなくなられたら——『人權』號がどうなつて了ふか、目に見えるやうだ。食事の後に甲板に上つて來て、巻揚機にもたれて靜かにパイプをふかすなんて愉しみはもう當分は味はへなくなる——本當です、當分は無理だ。い

や、全く、あんたは連中の寶物たからものを奪ひ取らうとしてゐなさる。私にとつては、平和をもたらず者なのに、それをあんたは」、さう云ひながら、この善良な魂はこみ上げるすすり泣きをこらへるのに本當に苦勞したのである。

大尉は船長の長廣舌ながひろくわぜつを面白さうに聽いてゐたが、今や酔ひもまはつて段々上機嫌になつて來て、かう應じた。「いかにも、平和をもたらず者、なかんづく、平和をもたらず戰士は幸ひなるかな。かの七十四門艦に乗り組んでゐる優男達やさなたちが正しくさういふ連中ではね。ほら、向うに停泊してゐる軍艦の舷窓から、何人か鼻先を突き出して私を待つてゐるでせう」、さう云つて、船室の窓越しに「ベリポテント」號を指さした。「でも、氣を落としちゃいけません。そんなにがつかりした顔をしてはいけません。この私が請け合ひます、きつと國王陛下の御嘉賞かしゃうの言葉が頂ける。間違ひない、陛下は必ずお喜びになる。何しろ、當節は、陛下より拜領の堅ビスケットを水兵どもが有り難がつて貪りくらふ譯でもなく、船長達にした所で、水夫の一人や二人を御國のために差し出す事に腹の底では面白くない顔をするやうな御時世だ。それなのに、少くとも一人の船長は船乗り仲間の華はなとも云ふべき水夫を喜んで陛下にたてまつり、その水夫にしてからが、同じく忠義の心を發揮はつぎして反抗のそぶりだに見せないといふのですからな

——それはともかく、わが優男はいづこにおはす？ やあ」と、船室の開いた扉の先を見やりながら、彼は云つた。「やつて来たな。ほい、これはたまげた。なんと、収納箱を引きずつてござる——旅行鞆を抱へたアポロン（古代ギリシヤ・ローマの源々しく美しい青年の神） よろしくだ——おいおい」と歩み寄つて、「そんな大きな箱を軍艦に持ち込んではいかん。軍艦では、箱と云つたら、弾丸を入れるものだ。持物は袋に入れるんだ。騎兵には長靴と鞍、水兵には袋とハンモックと相場が決つてゐる」。

収納箱から袋への入れ替へがすみ、大尉は水夫が小艇に乗り込むのを見て、自分もその後を續いて「人間の権利」號から離れ去つた。それが商船の名前だつた。もつとも、船長も乗組員も船乗りの流儀に従つて、「人權」と縮めて呼んでゐた。この商船の船主といふのがダンディ港（スコットランド東部、テイ灣に臨む港市。ニュート、造船で知られる） で人に知られた一刺客（いちしやくこ）で、トマス・ペイン（イギリスに生れ、獨立前夜のアメリカ及び革命當時のフランスで活躍した自由思想家、『モン・センス』（一七七〇）、『人間の権利』（一七九一、九二）、一七三七、一八〇九）の熱烈な崇拜者だつたのである。當時はエドモンド・バーク（イギリスの政治家・保守主義思想家。アメリカ獨立革命時には武力彈壓政策の非を唱へ、植民地との和解を訴へる一方、一七二九、九七）のフランス革命批判を辯駁（べんぱく）するペインの『人間の権利』が上梓（じやうし）されて日も浅く、それが至る處で評判になつてゐた。ダンディ港の船主は持船にペインの本の題名をつけて、同時代のフィラデルフィ

アの船主ステイヴン・ジラード（フランス生まれのアメリカの銀行家・慈善事業家。啓蒙主義の原理を熱烈に支持。一七五〇〜一八三一）が、生れ故郷のフランス

及びフランスの自由思想家に共感を示すべく、持船にヴォルテールやデイドロ（フランスの哲學者・啓蒙思想家。ダランベールと共に「百科全書」を編輯。一七二三〜八四）に因んだ名前をつけたのと相似たふるまひに及んだ譯だ。

それはともかく、ビリーの乗った小艇が商船の船尾の下部を掠め過ぎ、士官も漕ぎ手も——ある者は苦々しげに、ある者は嬉しげに——船尾に鮮やかに記された船名を眺めてゐた丁度その時、新規補充の水夫ビリーは艇長に命じられて座つてゐた小艇の船首から勢ひよく立ち上がり、黙りこくつて船尾手摺りからこちらを憂はしげに見送る朋輩に對し、帽子を振つて氣持の良い別れの挨拶をし、しかる後、船自體にも挨拶するかのやうに、かう叫んだ。「お前ともお別れだ。さやうなら、なつかしの『人間の權利』號よ」。

「座るんだ、おい」と、大尉が烈しく怒鳴つて、階級にふさはしい威嚴を即座に示したが、その實、微笑をこらへるのに苦勞してゐた。

いかにもビリーの行爲は海軍の仕來りを甚しく毀損するものだった。けれども、そんな仕來りを一度も教へられた事がなかつたのだから、それを思へば、ビリーが船に向つて挨拶なんかしなければ、大尉にしてもそれ程厳しく叱責する事はなかつたらう。だが、大尉はこの最後の

訣別の行爲を、新規補充兵の胸奥が暗黙裡に吐露されたものと見た。すなはち、強制徵用一般に對する、取り分け徵用した彼自身に對する隱微な當てこすりと取つたのだ。しかし、それが結果として當てこすりに見えたとしても、當人自體はそんな事を意圖してはゐなかつたと考へるのが妥當であらう。と云ふのも、ビリーは健康、若さ、大らかな心をたつぷりと具へてゐて、いとも陽氣な資質に恵まれてゐたが、諷刺の資質となるとまるで持ち合はせてゐなかつたからだ。諷刺の意慾もなければ、惡巧みの才にも缺けてゐた。二枚舌を使つたり、遠回しに當てついたりするやうな事は、彼の性質からして全く考へられなかつた。

自らが強制徵用された事についても、彼はいかなる天候の變化にも對應して來たのと寸分變らぬ態度で受け容れてゐるやうに見えた。哲人さながら悟りを開いた人間だつたといふのではない。が、動物さながら、それと知らずして事實上の宿命論者だつたのである。それに、彼はこの冒險心をそそるやうな境遇の變化をむしろ嬉しく思つてゐたかもしれない。なにしろ、行手には新奇な情景や勇壯な刺戟が待ち受けてゐるのだ。

「ベリポテント」號上の人となるや、我らが水夫はたちまち有能な船乗りと認められ、前檣樓の右舷當直員として配屬された。彼はすぐに仕事に馴染み、その氣取らぬ男前振りと、

いかにも氣持の良い樂天家の態度ゆゑに、誰からも好感を懷かれずにはゐなかつた。いつも食事を共にする仲間の間で彼以上に陽氣な者はゐなかつた。その點、彼と同じく強制徵用された船員仲間の他の若干の者達とは際立つた對照をなしてゐた。と云ふのも、それらの連中は仕事に暇になつたりすると、とかく憂鬱な氣分になりがちで、人によつてはひどく不機嫌な心持に陥る場合もあつたからだ。殊に、第二折半直（二時間交替の當直を折半直といひ、第一折半直が十六時、十八時、第二折半直が十八時二十時、他の當直は四時間交替）に於いてゐて、黄昏時たそがれが迫る時刻にはその傾向が強かつた。けれども、彼等は我々が前檣樓員（檣樓は艦船のマストの上にある物見の場所。前檣樓員は船首に近いマスト上で見張りを務める者）ほど若くはなかつたし、家庭の團樂だんらくの味を知る者も多分少くはなかつた。また、妻子を不安な中に殘して來た者もゐたらうし、然るべき親類縁者の無い者などは殆どゐなかつた筈だ。しかるに、ビリーはと云へば、やがて明らかになるやうに、彼一人の身體が彼の全家族をなしてゐたのである。